

彙

報

昭和五二年六月より
昭和五三年五月まで

研究狀況

班 研究

東 方 部

先秦時代文物の研究

班長 林 巳奈夫

七月まで、林班長の歐州出張中、引きつづき新出土先秦文物の紹介を行なった。班長歸國後、九月から『周禮』の會讀を再開し、地官大司徒から載師までを、小南、江村、杉本、上山、桑山、林、吉田が擔當した。またその間、主として先秦に關する個人の研究發表も並行して行なった。

六月一〇日 馬王堆三號漢墓『老子』卷前佚書の性格 江村 治樹

六月二四日 湖北江陵鳳凰山前漢墓について 杉本 憲司

七月八日 中國旅行報告(スライド映寫、中國考古學の現狀について) 杉本 憲司

九月三〇日 『孫臏兵法』について 吉田光邦、秋山進午

一〇月七日 歐洲旅行報告(スライド映寫、中國考古遺物の紹介) 池田 秀三、林 巳奈夫

一〇月二日 春秋戰國時代青銅器の編年 林 巳奈夫

一月四日 前漢の昇仙圖 曾布川 寛

一月一八日 春秋戰國時代の都城 秋山 進午

二月二日 先秦時代の禮秩序—考古學的復原— 杉本 憲司

二月一六日 帛書『戰國策』について 小南 一郎

一月二七日 先秦時代の醫學 吉田 光邦

二月二四日 アフガニスタン調査報告(スライド映寫、陶器製作の現狀について) 桑山 正進

二月一〇日 周禮と王安石の改革 衣川 強

二月二四日 周禮の構造 上山 春平

四月一四日 春秋戰國時代の武器の銘文—とくに華北地域(燕をのぞく)の銅戈の銘文について— 江村 治樹

四月二八日 故宮博物院の沿革について、同博物院の青銅器の紹介(スライド映寫) 樋口 隆康

五月二二日 先秦時代の宮室 田中 淡

五月二六日 先秦都城集成 桑山 正進

漢書の研究 班長 梅原 郁

「溝洫志」「律曆志」および「郊祀志」の譯を終り、その注を作成しつつあると同時に、班員の永田英正によって「食貨志」本文の校勘記が作られた。また「律曆志」の譯は川勝義雄と橋本敬造によって公刊された。なお「五行志」の中巻をもって本研究班は一應打ち切られる。

中國近世の都市と文化 班長 梅原 郁

宋以後の中國における大都市の幾つかを選び、その歴史的變遷、都市内部の政治・社會・文化各方面について精密な研究を行なう。さしあたり、吳自牧『夢粱錄』を會讀し、譯注を作ると同時に、大縮尺の地形圖を基に、文獻をフルに使って、開封・杭州・蘇州などの各時代の復原を試みる。

中國中世の文化と社會 班長 川勝 義雄

五世紀から八世紀に至る中國の社會において、宗教的精神がさまざまな文化現象の根底に横たわっていることに注視して、昨年度にひきつづき、唐の道宣編『廣弘明集』の會讀を終了し、現在、卷十九「法義篇」の會讀を續けつつ、同卷に含まれる六朝の佛教論考の譯注を完成しつつある。

なお、思想的觀點からの研究として、左記の發表が行なわれた。

九月二一日 僧叡「喻疑」をめぐる 班長 山田 慶兒

九月二九日 南岳慧思について 班長 山田 慶兒

新發現科學史資料の研究 班長 山田 慶兒

五二年度から五年間にわたって、中國において新たに發見・發掘された科學技術史の資料をとりあげてゆく。

あらためていうまでもなく、最近、中國の考古學はめざましい成果を収め、おびただしい文獻や

遺物がつぎつぎに出土している。そのなかには、馬王堆や武威の漢墓から発見された醫書をはじめ、これまでの空白を埋めたり、あるいは、従来の定説をくつがえしたりするであろう多くの貴重な科學技術史關係の資料がふくまれている。そうした発見はかならずしも考古學の分野、あるいは古代史の分野だけにかぎらない。『天工開物』の著者明の宋應星の著作四點が発見されたのが、その一例である。文獻と遺物とを問わず、時代と分野とを問わず、そうした新發現の資料をとりあげていく。

最初にとりあげたのは武威の醫簡であり、赤堀昭氏による報告を昨年度の『東方學報』に掲載した。それにひきつづき、馬王堆出土の醫書の會讀を終了した。またその間、各班員の研究の報告をもあわせておこなっている。成果は逐次、『東方學報』に發表していく豫定である。

晚唐文學

班長 荒井 健

李商隱の詩の注釋を行ってきた本班は、七絶二六首・七律二六首を讀みおえ、五三年三月に研究終了。その成果の一部は『李義山詩七絶集釋稿(一)』および『李義山詩各本篇目對照表』として、『東方學報』五〇冊に發表。さらに『集釋』續稿を『學報』五一冊以降に逐次掲載の豫定。

李商隱研究

班長 荒井 健

五三年度から三年間、晚唐の詩人・李商隱の作品のなかでも最も重要かつ難解な七律に對象をしぼり、晚唐文學班における成果をふまえ、唐詩百名家全集本を底本としてこれまでに蒐集した各種テキスト等を参照しつつ、會讀形式により、できるかぎり精細な注釋校訂の作業を進めてゆく。

今年度は七律のうちで無題詩に準ずる内容を持つと思われる「借題」の諸詩篇から讀みはじめていく。

明清社會の變革に關する研究

班長 小野 和子

この研究は、明末清初期を一つの社會變革期として把える立場から、變革の實態を政治・社會・經濟・思想の各側面において多角的に考察するものである。都市と農村、民衆運動、郷紳、奴僕、徭役改革、小農經營、文化知識人の動向など、明清社會全般にわたって各方面から研究報告がなされた。同時に基礎作業として、『皇明經世文編』選讀・注作成、および『雍正硃批諭旨』索引化もおこなっている。次第に問題點をしぼり、研究發表回數をふやしている。

清代經學の研究

班長 尾崎雄二郎

顧炎武『日知錄』三十二卷本の會讀は、新年度から書に入った。小學別班では顧の『音論』上中下三卷のうち、前二卷の譯注を完成した。やがて發表の運びとなろう。新年度の非常勤講師には田中麻紗巳氏をお願いした。

五四運動研究

班長 狹間 直樹

當研究班は、五二年度を以て五年の研究計畫を終了した。最終年度に當り、研究報告論文集の出版にむけて、各班員の論文作成のための研究發表が主體となった。題目のみを列記すれば、『中國國民黨の誕生』『張謇の企業者活動』『歐事研究會について』『前期創造社』『五四運動と救國十人團』『第一次大戦期 日本對中國外交』『關稅問題と中國』『五四の「青年像」——匡互生事略』『五四運動と救國十人團再論』『パリ講和會議について

て』『辛亥革命時期の新彊省』等があった。

六月には、『毛澤東』の著書で有名なジエローム・チェン氏に、『袁世凱與近代中國』と題する特別講演をおねがひした。また十一月には、日本社會科學者友好參觀團に参加された小野和子氏が『中國の教育革命と社會科學界の現狀』と題する報告をされた。

このほか、書評・紹介では、伊藤銀月『東洋安危新水滸傳』、『中國青年』全卷、中國近代史編寫小組『中國近代史』、D. A. Jordan "The Northern Expedition", E. Friedmann "Backward Toward Revolution" をとりあげた。

現代中國の政治過程と民衆の意識

班長 竹内 實

現代中國の一般的諸問題を取りあつかうA班の研究として、昭和五十二年六月十四日、青木五郎の『馮友蘭について』、九月二十七日、阿頼耶順宏、深澤一幸の『中國報告』、十月十一日、王正義(チェスター・ワン)の『五四における王國維』、十月二十五日、北村(政治)、夫馬(歴史)、深澤(文學)による『現狀分析』、十一月八日、相浦果の『ロマン・ロランと中國』、十一月二十一日、重森宣人の『ソ連刊行の中國に關する現代史資料』、昭和五十三年一月二十四日、陳恒嘉の『文字改革の問題點』、二月七日、江頭數馬の『中國の現狀報告』、五月九日、北村(紅旗)、夫馬(歴史研究)、深澤(人民文學)、河田(哲學研究)による『現狀分析』の發表をおこなった。毛澤東研究のB班としては、昭和五十二年六月二十八日、『毛澤東第五卷の問題點』を全員で討論し、昭和五十三年五月二十三日、竹内實の『毛澤東第五卷の間

題點」(一九四九年)の發表があった。

民國初期の文化と社會

班長 狹間 直樹

當研究班は、五二年度を以て終了した五四運動研究班の繼承發展をめざす。民國初期とは、ほぼ辛亥革命から國民革命までの時期を包括するものと定義している。新民主主義革命の端緒としての五四運動を、より廣い視野から分析するために、民國初期の軍閥政治と帝國主義の動向、それに對置する反帝反封建闘争(農民運動、勞働運動、思想闘争)を總合的に把握することが、この研究班の目的である。

五月末までの研究報告は、以下の如くであつた。

四月二八日 『辛亥革命の研究』書評(一)

川井 悟 高橋良和

五月一二日 第一次大戰期日本の對中

國外交をどう把握するか

藤本 博生

五月一九日 五四運動と安徽派軍閥

狹間 直樹

五月二六日 『婦女評論』を論ず

小野 和子

日本部

社會運動の研究

班長 渡部 徹

昭和四八年四月からの、主として兩大戦間の内外の社會運動の實態分析を繼續し、五一年度より三カ年で成果をまとめる豫定。

日中戦争期の政治と社會

班長 古屋 哲夫

この研究班は「滿洲事變」以降、日中戦争の全面的擴大、太平洋戦争へいたる時期を対象として、總力戰體制の形成、その對内外政策、社會、思想狀況、民衆動員の展開などを總合的に明らかにす

ることを目的としている。

日本帝國主義の朝鮮支配

班長 飯沼 二郎

この研究班はおもに一九一〇年朝鮮併合以降の日本帝國主義の朝鮮にたいする植民地支配の形成と實態、およびそれに對する朝鮮民衆の民族解放の闘争の過程を、朝鮮の内在的發展の把握をふまえて、諸側面から究明しようとしている。

十九世紀日本の情報と社會變動

班長 吉田 光邦

社會變動に情報がどのような意味と機能をもつか。このテーマを、比較史・比較社會的検討をふまえて明らかにするのが、この班の目的である。從來、もっぱら技術史的側面からのみ研究されてきた情報の問題を、技術史の深みからのみならず、社會・文化の觀點からも新たな光を當ててみようとするのが、われらの願いである。ともすれば、情報論は無限の擴散的傾向を秘めていた。

十九世紀日本と限定を付したのは、研究對象がここに限られているというのではなく、擴散性に對する「礎」の役割をここに求めているに過ぎない。さまざまな社會と時代の検討を経て生み出された理論と着想が、十九世紀日本という限定された時代と社會の情報との比較に供されるのである。四月から始まったばかりなのでまだ暗中摸索の段階だが、中國史研究者の参加を望む。

日本における市民文化の形成(文明開化の研究)

班長 林屋辰三郎

班長林屋辰三郎教授の定年退官をもって、本研究會は三期七年間にわたる活動を終え、第三期報告書『文明開化の研究』の刊行を残すのみとなった。毎週水曜日におこなわれていた研究會は、二

月二十二日をもって終り、三月一日には一期より三期にわたる班員有志の解散會が開かれた。また二月には第二期報告書『幕末文化の研究』が刊行された。

家族問題の研究

班長 太田 武男

この研究は、夫婦・親子・相續などをめぐる諸問題に關する理論的・實證的研究を、その主たる目的ないし内容とする。從來、この方面の研究は、それぞれの専門分野において個別的に行なわれていたが、今回の研究は、法律學的な觀點からの考察を中心としつつも、それに社會人類學的な觀點からの考察などを加えて、總合的に行なわんとする點において特徴的である。昭和四一年四月より毎週一回研究會を開いて、主として夫婦問題、なかでもとくに「離婚問題」について研究をすすめる。その成果は『現代の離婚問題』(有斐閣)として世に送り、また、昭和四四年四月からは、主として親子問題を中心に研究を進め、その成果は、『現代の親子問題』(有斐閣)として世に送った。そして、昭和五〇年四月より第三期に入り、現代の相續問題、なかでも遺言制度ないし遺言をめぐる諸問題についての總合的な研究を行なっている。

西洋部

一九三〇年代のヨーロッパ 班長 河野 健二

現在、研究の取りまとめ作業をおこなっている。その取りまとめの方法は大體次のようなものである。すなわち、個人―集團―社會という問題設定をおこない、從來の多くの研究が大狀況の側から出發したのにならして、個人の具體的には知識人

の側から出發し、そうしてその個々の時代認識、更に各個人が屬した集團の意味を探り、それらを綜合化することによって三〇年代の新しいイメージをつくりだそうとするものである。

前近代社會における社會動態

班長 會田 雄次

前近代社會について、從來ややもすればア・プリオリに前提されてきた、固定・停滯という規定に對して、社會内に存続した流動性を抽出し、その規模と意味と社會全體への影響を検討する努力がつづけられている。前近代中國での貴族や都市名族や佛教政策のもった意味の他、日本や西洋についても、たとえば都市文化や大學、あるいは巡歴藝人や貧民が、社會變動という視角から、地理的・階層的に再検討されている。

人文學の方法

班長 上山 春平

この研究班は當面歴史學の方法論を中心テーマにしている。最近、これまでの學問分類および科學論の比較検討をふまえたうえで、比較思想、日本における外來思想の受容、あるいは科學史と哲學の關連など、具體的問題に即して方法論的問題を検討している。

ボードレール・惡の花 註釋

班長 多田道太郎

サブ・チエ詩篇およびマリ・ド・ブラン詩篇を讀み終えた。註釋原稿執筆中。

社會編成の比較人類學的研究

班長 谷 泰

社會人類學は、これまで、出自集團とか親族といった基礎的な集團を「構造」として研究してきた。社會構造は理論的な分析概念としても、また

經驗的に把握することのできる實在的なものとしても、多義的に用いられてきた。しかし、最近になって、研究が多面的に發展してくるに従い、基礎集團を「構造」として把握する立場の限界が明らかになってきた。本研究班は、新たに、社會的諸集團が個人や小集團を軸として、發生的にどのように編成されているのかを追求する。個人間の對面行動や近接行動などが、社會關係行動を編成してゆく過程を、いくつかの異なる文化の事例をとりあげて比較し、社會的諸集團の編成原理を導き出すことによって、社會人類學の古典的課題に新しい光を投げかけることを目指す。

人類學における方法論の研究

班長 谷 泰

現在人類學の方法はきわめて多岐にわたって多樣化の状況にあるが、本研究班は、これらの諸方法を自覺的にとらえ直し、新しく用いられるようになった生態人類學、エスノサイエンス、言語分析等の方法の現實への適用可能性、有効性と限界の検討をおこなって來た。

ところでその検討過程を通じて、言表化された表現行動と言表化されないレベルでの認知との關係をどのように處理するかという方法上の問題が、今回はとくに議論された。またメタフォリックな表象をどのように取扱うかという問題もとりあげられた。

ところで本研究班は五二年三月をもって終了し、全員執筆段階に入り、四月からは、「生活様式と關係行動」というテーマで新たな研究班が組織された。この新班については、次回に詳しく報告する。

個人研究

東方部

貴族制社會とその文化

毛澤東の思想

中國音韻史の研究

殷周文物の考古學的研究

禪宗文獻の研究

中國の詩學

宋代の科學と技術

宋代の開封と臨安

六朝隋唐精神史

隋唐社會史研究

中國中世土地所有制の研究

五四時期における中國社會主義の研究

中國近代婦人解放史

白氏文集語彙索引の編集

唐宋繪畫史の研究

中國歷史地理學

中國建築の様式・技法・空間

初期新民主主義革命史の研究

明清民衆運動の研究

魏晉詩史論

中國古代官僚制の研究

日本部

日本勞働運動史

家族法の研究

横井時敬の研究

日本技術史の研究

川勝 義雄

竹内 實

尾崎雄二郎

林 巳奈夫

柳田 聖山

荒井 健

山田 慶兒

梅原 郁

吉川 忠夫

瀨波 護

勝村 哲也

狹間 直樹

小野 和子

今井 清

曾布川 寛

秋山 元秀

田中 淡

森 時彦

夫馬 進

茂木 信之

江村 治樹

渡部 徹

太田 武男

飯沼 二郎

吉田 光邦

日本ファシズムの研究 古屋 哲夫
 日本近代文化史の研究 飛鳥井雅道
 廢藩置縣の研究 佐々木 克
 寛永文化の研究 熊倉 功夫
 日本帝國主義の研究 副島 圓照
 文化史および文明史としての國民國家の形成 横山 俊夫
 日本近代社會の研究 園田 英弘
 日本勞働史 大前 眞

西洋部
 ヨーロッパ15・16世紀の社會と思想 會田 雄次
 世界資本主義の構造 河野 健二
 人文科學の方法 上山 春平
 ボードレールの「脱出」について 多田道太郎
 宗教改革と政治・社會 中村賢二郎
 ルソーの政治思想について 樋口 謹一
 西洋論理想史 山下 正男
 人間關係行動の比較分析 阪上 孝
 フランス社會主義思想の研究 内井 惣七
 モデル理論とその應用 前川 和也
 シュメール都市の比較類型論的研究 見市 雅俊
 サンシモン主義の理論と實踐 見市 雅俊
 一八世紀フランス ユートピア文學の研究 松田 清

東方部研究會

五月二年
 一月九日 田中論文「中國壁畫古墳の建築圖と初唐建築の様式について」 濱田 正美
 批評 夫馬論文「明末の都市改革と杭州民變」批評 深澤 一幸

一月三〇日 町田論文「華北地方における漢墓の構造」批評 江村 治樹
 二月七日 小野論文「婚姻法貫徹運動をめぐって」批評 柳田 聖山
 二月一四日 曾布川論文「五代北宋初期山水畫の一考察——判浩・關全・郭忠恕・燕文貴——」批評 狹間 直樹

五三年
 三月一五日 殷周青銅器銘文鑄造法に關する若干の問題 林 巳奈夫
 前漢の昇仙圖 曾布川 寛
 三月二二日 顏師古の漢書注 吉川 忠夫
 陶淵明論 茂木 信之

事業概況

夏期講座「原典を読む」 於 分館講堂
 五月二年八月 大久保利通「征韓論に關する意見書」 於 分館講堂
 一日 宮崎安貞「農業全書」 飯沼 二郎
 二日 郭熙「林泉高致」 曾布川 寛
 三日 顏之推と顏師古 吉川 忠夫
 ヒトラーの戦争「計畫」について 見市 雅俊
 コント「精神的權力について」 阪上 孝

開所記念公開講演會
 五月二年一月一五日 於 樂友會館

全國水平社の福岡連隊「爆破陰謀事件」 渡部 徹
 中國のアナーキズム 定年退官記念講演會 森 時彦
 五三年三月一一日 於 分館講堂
 日本文化のあゆみ 林屋辰三郎
 五二年一月七日 於 本館大會議室
 日本の銅輸出と一七世紀ヨーロッパ
 コペンハーゲン大學 K・グラマン教授
 五三年四月一四日 於 本館大會議室
 三〇年代イギリス研究の新しい動向
 ケンブリッジ大學 H・ペリン博士
 經濟學會と共催

昭和五二年度漢籍擔當職員講習會
 文部省學術情報圖書館課と本所附屬東洋學文獻センターとの共催による第四回講習會は、六月二七日から七月二日まで、左の如く行なわれた。
 六月二七日 開會にあたって
 文部省學術國際局情 杉山 裕
 報圖書館課長補佐 中國の書物について 森 鹿三
 京大名譽教授 漢籍整理法について 倉田淳之助
 京都産業大學教授 經部書 川勝 義雄
 史部書 磯波 護
 カードのつくりかたA 小國 健一
 京都大學附屬圖書館見學 現代中國の書物をめぐって 酒井 豊

六月二八日 經部書 川勝 義雄
 史部書 磯波 護
 カードのつくりかたA 小國 健一
 京都大學附屬圖書館見學 現代中國の書物をめぐって 酒井 豊

子部書 竹内 實
梅原 郁
七月一日 カードのつくりかたB 今井 清
荒井 健
集部書・叢書
七月二日 討議および情報交換 尾崎雄二郎
閉會にあつて 林屋辰三郎

所員動靜

○熊倉功夫助手（日本部）は、講師に昇任（五二年六月一六日付）。
○中村賢二郎助教授（西洋部）は、教授に昇任（一〇月一日付）。
○山田慶兒助教授（東方面）は、教授に昇任。
○林屋辰三郎教授（日本部）は、停年退官。
○所長林屋辰三郎教授は五三年三月三十一日任期満了、河野健二教授（西洋部）が新所長に就任、附屬東洋學文獻センター長に併任。（以上五三年四月一日付）
○吉田光邦教授は、五二年六月七日伊丹發、廣州博物館、石灣陶器工場、桂林絹織物工場、馬王堆、湖南省博物館で陶器工藝に關する調査及び資料収集を終え、六月一九日歸國。
○飯沼二郎教授は、六月三〇日福岡發、北京農業科學試驗所、鄭州農產物處理工場、復旦大學で農業調査及び資料収集を終え、七月一三日歸國。
○前川和也助手は、六月二七日羽田發、コレージュ・ド・フランスで第二四回國際アッシリア學會に出席、ミュンヘン大學等で資料収集し、七月二一日歸國。

○谷 泰助教授は、七月一五日羽田發、カプールの邊、ローマ、ベオグラード大學等有畜社會の比較文化的研究（豫備調査）を終え、九月九日歸國。
○小野和子講師、深澤一幸助手は、八月一日舞鶴港發、大連の水産公司、北京大學、故宮博物館等で現代中國の實情調査及び資料収集を終え、同月一五日歸國。
○田中 淡助手は、八月九日羽田發、北京の頤和園、大同の華嚴寺、龍門石窟等で歴史的都市及び建築に關する研究調査を終え、同月二三日歸國。
○江村治樹助手は、九月六日羽田發、故宮博物館、靈渠遺跡・廣州博物館等で、美術及び考古學に關する研究調査を終え、同月二一日歸國。
○小野和子講師は、九月二七日羽田發、日本社會科學者友好參觀團員として北京大學・社會科學院・大慶油田・延安の革命博物館等で、現代中國における社會科學の調査及び資料収集を終え、一〇月二八日歸國。
○横山俊夫助手は、一〇月三日羽田發、再度、オックスフォード大學で一九世紀の日英史研究及び資料収集し、五三年九月三〇日歸國予定。
○御牧克己助手は、五二年一二月一三日羽田發、ベナレス・ダラムサラ市内等で佛教徒の生活意識調査及び教主との會見を終え、五三年一月一八日歸國。
○熊倉功夫講師は、五二年一二月一六日羽田發、裏千家サンフランシスコ支部、同ロスアンゼルス支部等で、茶道社會調査を終え、五三年一月一一日歸國。

○中村賢二郎教授は、文部省在外研究員（短期）として、五三年三月二日羽田發、オーエンハイム農業單科大學、ザルツブルク公文書館、チューリッヒ・ローマ大學等で宗教改革運動の研究を終え、同年四月三〇日歸國。
○樋口謹一助教授は、五三年四月三日伊丹發、復旦大學、廣州博物館等で中國社會の調査及び資料収集を終え、同月一七日歸國。
○梅原 郁助教授は、五三年三月二九日羽田發、湖南省・上海博物館等で、中國社會の調査及び學術界との交流並びに資料収集を終え、同年四月一四日歸國。
○林 已奈夫教授は、五三年三月二四日伊丹發、臺北の國立故宮博物院で中國青銅器の研究を終え、同年四月一三日歸國。
○樋口謹一助教授は、五三年四月二日羽田發、北京の中日友好協會、清華大學、魯迅記念館等で中國社會の調査を終え、同年五月七日歸國。
○大前 眞助手は、五三年四月二一日羽田發、オックスフォード・ケンブリッジ・パリ大學等で日英勞使關係比較研究を終え、同年六月一七日歸國。
○本學研修員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。
Dennerline Jerry P. ボモナ大學助教授
明清時代政治社會史研究
指導教官 小野講師
期間 五二年七月～同年八月
Panteis Ellis Tinos ミシガン大學院生

漢代邊境政策について 指導教官 川勝教授

期間 五二年七月～同年十二月

Constance Johnson ペンシルバニア大學院生

宋代の任官制度について

指導教官 梅原助教

期間 五二年八月～同年十二月

John D. Langlois ボードウィン・カレッジ助教

授

宋から明への政治思想及び法制の研究

指導教官 梅原助教

期間 五二年九月～五三年八月

Peter K. Bol プリンストン大學院生

宋代地方政治史の研究 指導教官 梅原助教

期間 五二年九月～五三年八月

Carl Bielefeldt ハークレイ大學院生

正法眼藏 指導教官 柳田教授

期間 五二年十二月～五三年十一月

Chu Anna プリンストン大學院生

宋代政府の救済事業 指導教官 梅原助教

期間 五二年八月～五三年二月

Laurence Komitz コロンビア大學院生

戰國時代の藝能 指導教官 林屋教授

期間 五二年一〇月～五三年三月

Peter Konicki オックスフォード大學研修生

尾崎紅葉と江戸文學 指導教官 飛鳥井助教

期間 五三年一月～同年二月

Joshua Fogel コロンビア大學院生

内藤湖南の研究 指導教官 竹内教授

期間 五二年十二月～五四年一月

Janet Abramowitz ハーバード大學 フォッグ美術館教授

日本藝術に關する研究 指導教官 吉田教授

期間 五三年三月～五四年二月

李 景珉 フランス國立社會科學高等院研究員

第二次世界大戰後の朝鮮政治史 指導教官 飯沼二郎

期間 五三年四月～五四年四月

出版物

紀要

東方學報 第五〇冊（紀要第七七冊）

五三年二月二八日刊

人文學報 第四四號（紀要第七八冊）

五三年二月一五日刊

人文學報 第四五號（紀要第七九冊）

五三年三月三一日刊

研究報告その他

東洋學文獻類目 一九七五

五二年九月三〇日刊（附屬東洋學文獻センタ

ー編）

フランス・ブルジョア社會の成立

―第二帝政期の研究― 河野健二編

五二年十一月二四日（岩波書店）刊

辛亥革命の研究 小野川秀美・島田虔次編

五三年一月二七日（筑摩書房）刊

幕末文化の研究 林屋辰三郎編

五三年二月一六日（岩波書店）刊

中國の科學と科學者 山田慶兒編

五三年三月三一日刊